

史跡高山社跡 私立高山社蚕業学校

私立高山社蚕業学校は、1873年に養蚕（蚕の飼育・育成）に必要な基礎知識と専門的な技術を少年たちに教えるために設立されました。当時の高山の庄屋だった高山長五郎（1830～1886）が先祖代々の家で創業しました。2014年のユネスコ世界遺産 "富岡製糸場と関連遺産" に登録されています。

長五郎は、より効果的な養蚕方法を開発し、村の人々の収入を増やすことができると考え、学校を設立しました。蚕はデリケートなので、条件が悪いと病気になったり、死んだりすることがあります。長五郎は、農家の方が養蚕の最適な条件を理解すれば、その条件を再現し、絹生産の質と量を向上させることができると考えたのです。

彼は、通気性の改善や温湿度の管理に力を入れ、養蚕の清温育法を開発しました。先祖代々の家を解体して建て直し、カイコの発育に最適な温度、湿度、換気条件を決定するための実験をさらに進めることができたようにした。これが高山社養蚕学校となったのです。

中央校舎は、清温育法の為に建てられた特徴的な例です。蚕は上の階で飼育され、繭になるまで桑の葉を食べさせていました。自然対流は、床と屋根の間の通気孔から暖かい空気を吸い上げ、空気の流れを調整するため開閉します。蚕に餌を与えていたトレイは、空気を循環させるためのラックに入れ、理想的な環境を整えました。

また、長五郎は、清温育を学びながら、村の外から少年たちを学校に招きました。少年達は日本全国からはもちろん、中国や朝鮮半島からも来ました。1887年に学校は藤岡に移され、いくつかの建物のキャンパスを形成するために拡張されました。高山社はその分校の一つになりました。

研究室や桑の葉の貯蔵庫など、キャンパス内の多くの建物の基盤は今でも目に見える形で残っています。現在は学生寮の基礎部分だけが残っていますが、炊事場と風呂場は現存しており、学生が使用していた鋳鉄製の浴槽も残っています。

1878年、1890年、1895年には、養蚕法の教科書が出版され、学校では養蚕法の研修や普及のために使用されました。

高山社の貢献によって、20世紀初頭には日本は世界をリードする生糸の生産国となることができました。

しかし、機械や近代技術の導入に伴い、学校で教えられていた方法が代替され、1927年に閉校となりました。